



暮笛集

薄田泣菫著

本間文庫
文庫 14
D 197



60

65

70

75

80

85





文庫14
D 197



喜となきくのす夕吾
ぶ自けを人音さ暮は
のかれ聡ものぶ吹牧
みらば少な聞笛き童



はくがき

こは羊のとしの暮より亥のとしへ
かけての作なり野調もとより人に
誇るに足らずといへども吾胸いた
めたるいとし子よと思へばうち捨
てんことの情なうて茲にひと巻に
拾ひあつめしばかりぞ
こそ世に出すにあたりて親しき友
平尾不孤金尾思西の二子がねもど
ろに盡されしなさを深く謝する
なり

亥の歳初秋

泣董くるす

目次

詩のなやみ	一
鶺鴒	五
冬の歌	七
古鏡賦	九
虎が雨	四
村娘	六
暮春の賦	元
鶺鴒の歌	三
兄と妹	四
大原女	兎
盃賦	吾
絶句十九篇	壺
一、山雀	

二 獲物
 三 琥珀
 四 雛祭
 五 秋懷
 六 雲
 七 蟋蟀
 八 星
 九 鐘
 十 鬢の毛
 十一 紅涙
 十二 江戸河にて
 十三 玉腕
 十四 紅絹袖
 十五 螢
 十六 蟋蟀

二 五
 三 五
 四 五
 五 五
 六 六
 七 六
 八 六
 九 六
 十 六
 十一 六
 十二 六
 十三 六
 十四 六
 十五 七
 十六 七

十七 夕
 十八 眞珠
 十九 桐葉
 二十 尼が紅
 二十一 遊子
 二十二 巖頭にたちて
 二十三 春の夜
 二十四 關山曲
 二十五 旅客に與ふ
 二十六 壁にそめたる
 二十七 鄙ぶり
 二十八 ふなうた
 二十九 蛭少女
 三十 粉屋の女房
 三十一 娘をかしや

十七 七
 十八 七
 十九 七
 二十 七
 二十一 七
 二十二 七
 二十三 七
 二十四 七
 二十五 七
 二十六 七
 二十七 七
 二十八 七
 二十九 七
 三十 七
 三十一 七



燕の賦
百合花
秋の歌
木曾川にて
琵琶湖にて
加古河にて
楫保河にて
華燭賦

一五九
一五六
一五三
一五一
一四九
一四五
一四三
一三七



RIGAKU A
 R. Inazaki. Atanajo
 1929

蕪の賦
 百合花
 秋の賦
 水曾川にて
 琵琶湖にて
 加古河にて
 播保河にて
 華鶴賦

一五
 一四
 一三
 一二
 一一
 一〇
 九
 八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 一



暮
笛
集

薄
田
泣
董



詩
の
な
や
み

遅
日
卷
の

座
に
行
き

力
あ
る

句
に

く
る
し
み
ぬ

消 <small>き</small>	よ	柱 <small>はしら</small>	薄 <small>うす</small>	髪 <small>かみ</small>	さ
ゆ	し	な	情 <small>なさけ</small>	は	ば
る	答 <small>こたへ</small>	き	人 <small>ひと</small>	つ	價 <small>あひ</small>
響 <small>ひび</small>	に	搔 <small>か</small>	物 <small>もの</small>	人 <small>ひと</small>	詩 <small>うた</small>
の	似 <small>に</small>	く	緒 <small>いと</small>	の	に
み	た	が	を	子 <small>こ</small>	瘦 <small>や</small>
る	る	如 <small>ごと</small>	は	を	せ
	も				て

二 <small>に</small>	あ	情 <small>なさけ</small>	石 <small>いし</small>	深 <small>ふか</small>	詩 <small>うた</small>
羽 <small>はね</small>	ゝ	あ	を	く	は
の	田 <small>た</small>	る	包 <small>つつ</small>	沈 <small>しづ</small>	大 <small>おほ</small>
一 <small>ひと</small>	餌 <small>え</small>	子 <small>こ</small>	玉 <small>たま</small>	め	海 <small>うみ</small>
雀 <small>すずめ</small>	に	の	と	人 <small>ひと</small>	真 <small>ま</small>
錢 <small>ぜに</small>	あ	堪 <small>た</small>	い	に	珠 <small>たま</small>
か	け	へ	ふ	聞 <small>き</small>	狩 <small>かり</small>
	る	ん		く	

こゝに風流の
われ膝折りてあれ
學ばんに

こゝに有情の
われ手と女あれ
詢らんに

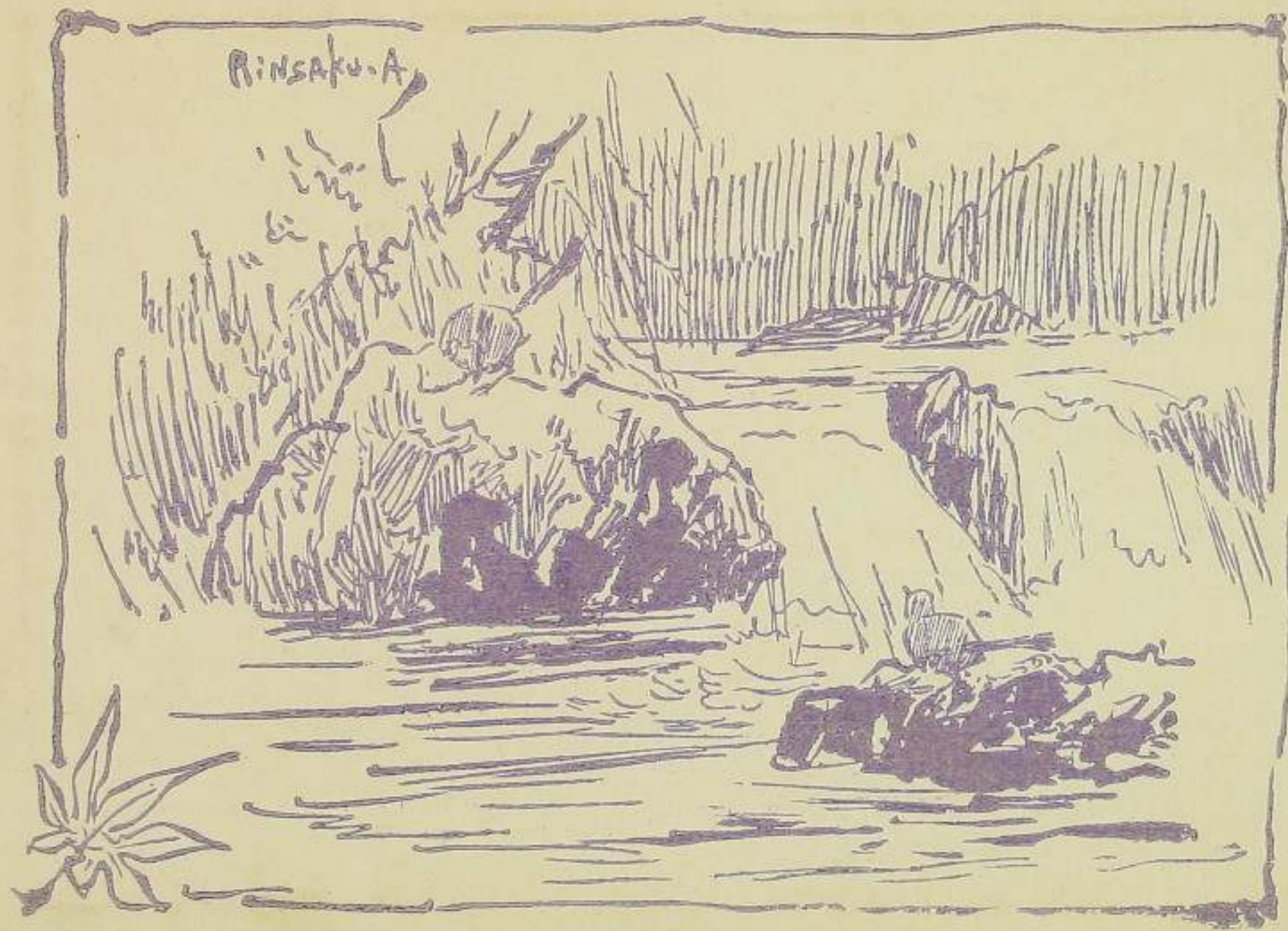
世に秀才なく、
われ唯ひとり
物狂

雨垂柏子、
無才を知るよ、
今ここに

鶴 鴿

鶴鴿雌雄下りて池園に遊ぶ。
人あり石を投げて追はんとす。
樹下に立ちてこの篇をつくる。

止めよ若者石とりて、
かの鶴鴿を追はんより、
拳に巴が額を打て、
禍鳥其處に巢くへるに、
小石踏み踏み瀨をわたる
無心の遊び罪なふか、
さば先づ垣に花を摘む



隣りの稚兒を蹴るべきに。

雌雄尾をふる首をふる

歌ふ姿を羨むか、

往いて木暗に夫と語る

君が妹を脅かせ。

花は踏まれて、蹶に

葉の粉ちるも微笑むを、

人は行きすり、故もなく

鳥叱らでは過ぎ得ざる。

吾あに是に言よせて、

友罵しるを好まんや、

鳥に情なき人の子は、

遂に隣と闘がでや。

やめよ若者かへるさに、
妹訪ひよりに語りみよ、
君有心者と喜びて、
両の腕を肩に委ねん。

冬の歌

冬は来れり山越えて、
里に入りたる旅人が、
散り透く森の下道に、
鹿の角得たる幸聞きて、
樵夫空兵衛朝明を
山に駆けたる噂あり。

薄き日影に茶の花の
こぼれ咲く頃蕪蕪て、
武者物語ひもとくに、
矢開ふかく調に乗り、
手柏子かるく打ちふれば、
妹背に立ちて興がるよ。

夜か子刻の鐘鳴りて、
市姫領を引き去れば、
小狐降りて下京の
月に冴えたる霜をふみ、
鳩もやあると唯獨り
數珠挽寝たる戸をくゞる。

吾鷹狩の戻り路

手がへり待ちて立てる時
流人領土を去る如く、
吹き倦んどたる北風の
後姿さむう悄々と
森をめぐりて行くを見ぬ。

かの銚山に年木伐る
斧の響きか一しきり
踏を叩いて静まれば、
世は寂寞の手に歸して、
いかめしい哉雲二十重、
また雪負うて峯に立てり。

古鏡賦

斧に倒れし白檀の

高き香森に散る如く、
薄衣とけば遠き世の
ふかき韻を身に逼る。
向へば花の羽衣の
袖のかほりを鼻に嗅ぎ、
叩けば玉の白金の
冠冕を弾く響あり。

こは古鏡往にし世に、
額白かりし上臈の
戀得で髪を裁ちし時、
投げてしものと君も見よ
横さにかゝる薄雲の
曇れる影も故づきて、
頼もしい哉祭壇の

聖き姿をうち湛ふ。

千載鏤の鈍ばみきて、
冷れたる面にさはりみよ、
花くだけちる短夜を、
瞳子凝らし、少女子が
玉の額をながれたる
熱き血汐の湧きかへり、
春の潮と見る迄に、
昔の夢の騒ぐらし。

亂心地の堪へざるに、
泡咲く酒の車だに、
濁ける舌にふくませよ、
袖に抱いて人知れず、

深野の末に踏み入りて、
妻覓と見るか物狂
背叩いて面撫でよ、
有心者得ぬと歌はんはんに、

宿る人霊のひららかば、
怨みある世の夢がたり、
名に戀しれど嫉みある
女神女子に幸貸さず、
人の情の薄かるに、
細き命をつなぎわび、
泣いて逝きたる上臈の
秘めし思を悼まんか。

あゝ幾度か若き身の、

狂氣をこそは望みしか、
今ぞ興あり怨みある、
其世の紀念古鏡

これ吾襟に藏め得ば、
よし京童は嘲るも、
世の煩らひを打ち捨て、
智覺なき身と化しもせん、

なう古鏡このあした、
汝を抱いて嘆く身の
迷懷は夢か屋氣樓
それにも似たる幻か、
孰れ覺むべきものならば、
儘よ短かき晝の間を、
飽かぬ睦にあこがれて、

悲しき闇を忘れまし。

虎が雨

大禮の虎女曾我十郎に別る涙變し
て雨となるされば五月二十八日多
く雨ふるをかく名づけ來れりわれ
一とせ此日此地をよどりてよめる

胸かはきたる人の世に、
此はなつかしや虎が雨
われ名を聞いて恨ある
世の情なさを忘れたり。

磔飛ぶ可きかの畔に、
歌うてかへる子を呼びて、
思情や湧くと觸れてみる
手心さとしくさぐらばや。

そは野の草に注ぎても、
花くれなるに吹くちふを、
里の女童年二七、
若し戀ひずやと思ふ故。

あかき涙のこほりたる
情の雨と名を聞けば、
光りさびしきこの夕を、
髪もしとくに染よかし。

額におつるしたゝりに、
渴ける舌を濡らせて、
色香なき世の煩ひを、
しばし忘れん心なり。



村娘

春ゆく夕白藤の
 花ちる蔭に身をよせて、
 泣くは行末さだめなき
 世のならはしを思ふもの。

知らずや薄き花びらに、
 春の目を焼く香あり。
 見ずやか細き鬢莖に、
 かなへをあぐる力あり。

路せき走る旅の人、
 しばし木暗に立ちよりて、
 冷たき胸を叩く手に、

など若き身を抱かざる。

誰に語らん和肌に

指をさはれば此は憂しや、

潮に似たる胸の氣の

浪とゆらぐを今ぞ知る、

春經てさぶる酒甕には、

色濃き酒の湧くものを、

瘡せし腕に血も冷むて、

苦き涙をぬぐふかな。

これは習慣にまた、

薄ら衣服を裁ちきれば、

もろき命をおもひみて、

たゞむに惜しき染小袖

神よ情ある人の子に、
盲目をゆるせ、ゆく春の
長きうれひを眺めては、
か弱き胸の堪へざるに。

暮春の賦

冷たき土窟に醸されて、
若紫の色深く、
泡さく酒の盃を、
吾唇に含ませよ、
暮れ行く春を顛きて、
細き腕の冷ゆる哉。

心周章つる佐保姫が、
旅の日急くか、この夕
人は夕飯に耽る間を、
花そここゝに散りこぼれ、
痛ましい哉、春の日の
快樂も土にかへりけり。

垂るゝ若葉の下がくれ、
亂れて細き燈火に、
瞳凝らして見入るれば、
莠にぬれる葉の粉や、
花なき今も香を吹いて、
残れる春を焼かんとす。
足にさはりて和らかき

名もなき草の花ふみて、
 思ふは弱き人の春、
 願粗き運命に、
 戀の常花ふみさかれ、
 憂しや、逝く日の無くてかは、
 暗まだ薄き彼方より、
 常若に笑む星の影、
 智恵ある風にきらめきて、
 夏來と知らず顔付よ、
 今冷やかに見かへして、
 吾嘲けるを白堪へじな、
 耳をすませば薄命の
 長き恨か、暗の夜を、

くだけて落つる芍薬や、
 吾も沈める此夜半を、
 毒ある花の香に酔ひて、
 消白て人靈と化せん哉、
 かゝる静寂をことならば、
 心ある子がものすさび、
 顛なく絃にふれもせば、
 弱き我身はくだけても、
 琴ひく君が胸の上に、
 涙のかぎりかけましを、
 あゝ恨みある春の夜の
 はそきあらしに熱情の
 焰な消しぞ、木がくれに、

のがれて急ぐ佐保姫が、
旅路を咀ふ蟲術の
息吹とはかん血汐なり。

鶺鴒の歌

吹革祭の日は寒く、
鍛治が女房友もなく、
ひねもす窓に居凭る時、
軒端づたひにこそつきて、
掛菜をそゝる音きけば、
鶺鴒來と知られけり。
樵夫の娘爪先を
爐にあたゝむる雪の朝
吹爐聲を近く聞き、

情郎戸に呼ぶと駈けいでよ、
可憐や軒に立ちくらし、
凍むて泣きし談あり。

吾今朝山に分け入りて、
谷の小陰に唯一羽、
鋭き嘴に萱さきて、
巢をあむ振を認めしが、
かへりて妹にさゝやくに、
猶吾聲をはいかりぬ。

なう鶺鴒木づたひに
ひとり興がる歌きけば、
吾夏の日の野の鳥の
誇る羽振も忘れはて、

箕蟲啄みて飛んでゆく、
細き姿をかいまみる哉

兄と妹

「……どこへに照りわたる天つ日の
もとに御身の幸福にあるべし、然り
われのを祈るべき哉」

兄

冬の日背をあたためて、
南の窓のたゞすまひ、
胸和ぐる心地すに、
來ずや暫しもなう妹

厨女行いて君ひとり、
燭細るまで針づとめ、
今朝人訪はず手とりて、
心なぐさに歌はんか。

妹

やさしの君が語かな、
朝食の皿は注ぎたり、
春着の袖はなは裁たず、
しばしは爰にかたらんか。

厨女お竹行いてより、
抱腹笑聞きねど、
君が情ある言の葉に、
憂慰むる妹が身ぞ。

兄

世に可愛しきは妹の
針とる傍に侍りて、

誦し出る戀の物語
調子剛しと指さすれ

そは此作者を目をやみて、
妹が襦袢白茶地の
丁子色柑子色にまがへばと
軽く手をうち笑ふとき

妹

世にかしきは吾兄の
「縁」音する行き見よと
手にとる書は読みやめて
我顔色をながむるに
そは梁走る小鼠の

餅ひく音よ心せで、
早讀みつけとうち笑みて、
君が腕にすがるとき

兄

春の夜ふかく月影に、
庭の樹間をさまよへど、
歌よむ興もおこらぬに、
琴ひけ妹とうながせば、

アイと琴とり柱をわきて、
奏でいでたる一曲の
あまりに調の切なるに、
睫毛うるみし夜もありき

妹

琴ひきさして見かへれば、
火影にそむき君泣くに、

「何悲しき」とよりそへば、
「感極る」と忍び音に。

「何故」「調よきに」「拙なるを、
せめて叱れ」と耻らへば、
無言に胸をかきいだき、
哀れや夜たゞ寝でありき。

兄

夏朝早く水くむと、
髪を抱いて走りしが、
戸に泣く聲に駈けゆけば、
「許せ水髪砕いて」と。

砕くも儘よ唯泣くな、
髪には惜しき涙をと、
言ふに可憐やしやくりあげ、
すかりて泣きし人は誰れ。

妹

秋の日、小狗かくれきて、
手馴の兎捕られぬと、
歌をもよまで窓に凭り、
面杖ついて歎けるを、

朝葉つむとて圃にゆき、
芋の葉かけに耳を見て、
抱きかへるに兄が身の
額づき謝せし日は何日か。

兄

笥子とりこんと夕闇を、
北の一間に走りしが、
「幽霊耳ひく守りて」と
髪ふりみだし叫べるに、

われ燭とりて駈け來れば、
「憎や此は琴」恐ちて見し
姿耻ぢてか、口細め、
燭吹きけして隠れしよ、

妹

朝遣遙の其の一日、
葡萄の棚の下かげに、

戀歌よまんと勇みたち、
柏子とりゆく勢を、

可愛しや、石に躓きて、
眉毛ひそませ怒るとき、
われ葉がくれの一房を、
摘みて詫にと懺めしよ、

兄

昨夜姫桃ちりこぼれ、
風香をのする春の日を、
丸鬘姿あわかにて、
君窓による夢みたり、

七、春經たる樟樹の、

若葉そろうて立つ如く、
君鬢づらの撓むまで、
髪ふさやかにたけ入りな。

妹

いはゞ巫覡嚴らしく、
皺古人に説くに似て、
夢といつはる吹聴語、
鼻うそやぎに其と知る。

昨日むすびし蝶々の
はや解けがちの風見ても、
兄よ再び女房の
心化粧はいはずあれ。

兄

世に名も高く響きたる
秀才の友にめあはせて、
げにふさはしき花妻と、
歌ひはやさん日は何日か。

君才敏く、情切に、
顔赤らめな光ある
廣き書齋の鍵とるに、
何耻かしき身ならんや。

妹

われ身弱くて年若く、
唯世にいで、耻あるを、
額青白き博士等の
ひかる瞳子に堪へんや。

希くはいつまでも、
君歌よむと文机に、
まどろむ夜半を衣かけて、
手にとる筆を去らしめよ。

兄

袖に秘めたる手を見せよ、
これ輝か、寒き日を、
可憐や獨り米磨ぐと、
煤け厨屋に水釣りて。

あゝ願はずや春の夜を、
金屏ひくき廣前に、
藤紫の袖をりて、

なよび姿に舞はんとは。

妹

否よ、そにして遊ばんは、
家に勞るゝ身に若かず。
興ある旅に行かんより、
つらくも吾はかへらんか。

花賣娘名はお京、
都に三歳聲かれて、
『うき夢見ぬ』と泣くみれば、
あはれや鬢もほろくと。

兄

知るか、まことに世は然り、

君葉がくれの花の身を、
いかに手折りて小狐の
野道にふくに忍びんや。

緋桃白桃そのかに、
愛と誠の神やどる、
無何有の郷の世にあらば、
君わて其處に走らんを。

妹

世に無何有なく、絶えてなく、
修羅永劫につゝかかんを、
せめては兄と唯ふたり、
生れし家に止まらん。

見よ、鳩ふたつ飛びあぐみ、
隣りの家根にかへりきて、
喜び鳴くよ。巢は空の
木よりゆかしと知るや君。

兄

殘んの城と立ちもり、
誠をたのむ團樂をも、
あはや無愁の大浪に、
まかれも行かん人は此處。

蛇にまかれて悲鳴する
弱き雀に似たらすや、
あゝ石とりて誰かよく
かの鎌首をくだかんか。

妹

友をうしなひ唯ひとり、
夕ぐれ坂に鳴き細る、
若き羊もかくばかり、
沈みて物を思はんや。

更に興ある事様に、
君が思慮をめぐらせて、
頗の可愛味罪もなく、
共に笑壺に入らしめよ。

兄

見よ、この蛇の行くところ、
悪しき臭氣に氣は汚れ、

善き、美しくしき、正しきは、
背さしむけ逃れ去る。

唯闇につく密事、
盗み、詐り、小賢こそ
侮り、驕り、似而非者の
偽善を彼が跡ふむよ。

妹

妻もつ水夫は遠く去り、
歌聲細る島蔭に、
日暮れて落つる夕汐も、
かく悲しげに見ゆんやは

兄よ、御身が顔色の、

あまり病者に似たらすや、
肌さらすな、朝北の
や、庭の樹に吹きたつに。

兄

汚れし毒は血に入りて、
世はさながらの地獄なるを
腕き身ひとり影もなく、
涙の谷にゆかんより、

むしろ慈とも身を化して、
腐れはてたる人の子の
腸裂いて、恨ある
工匠の手をも咀はんか。

妹

歎きの附子矢身をはみて、
人江堪へんや、請ふ泣くな、
われ乙女子の術知らず、
慰めもなく迷ふのみ。

兄よ、はよゑめ、門の戸に
といと音せば何とする、
日影も高くさし照るに、
爰に歌うて畢らんか。

兄

歌ふと聞けばなつかしな、
歩み倦んずる旅の日に、
樹蔭見るより嬉しきは、
「聖なる」歌を思ふとき。

よしさば歌へ、去年の春
野に興を得て走り書
『妹許ゆけ』と、龍犬の
首にむすびしかの歌を。

妹

われもそこをこそ、友袖子、
一日袂にさぐりみて、
美ましやと目を細め、
三たびも誦してかへりしよ。
君なぐさめん戯れぞ、
誦し出る調のわなよきて、
よしさゝ啼に似たりとも、

ゆめな笑ひぞ、吾兄よ。

(妹歌ふ)

古酒甕の
裂け目より、
したたる露は、
巳が身か。

甘しと嘗めて、
稱ふれど、
誰盃の
ものとせず。

爰に自然と、
妹の、

吾 ^{わが}	妹 ^{いも}	若 ^{わか}	あ	世 ^よ	ふ
笛 ^{ふえ}	と	葉 ^は	ま	の	と
と	ふ	の	り	市 ^{いち}	吾 ^{わが}
君 ^{きみ}	吹 ^か	蔭 ^{かげ}	に	人 ^{ひと}	胸 ^{むね}
た	い	に	や	の	の
ち	て	来 ^き	さ	か	ゆ
ち	見 ^み	て	し	ん	る
て	る		さ	に	ぎ
			に	は	た
					る

息 ^{いき}	裂 ^さ	春 ^{はる}	思 ^{おも}	む	深 ^{ふか}
吹 ^か	け	の	を	し	き
さ	し	日 ^ひ	波 ^{なみ}	る	慰 ^{なぐさ}
な	片 ^{かた}	小 ^こ	に	背 ^{そむ}	籍 ^{せき}
ぐ	拾 ^{ひろ}	笛 ^{ふえ}	消 ^け	い	の
さ	ひ	の	さ	て	な
む		野 ^の	ま	ゆ	か
に		の	し	き	
			を		

あ ゝ 妹 <small>いもうと</small> よ、 来 <small>こ</small> ん 世 <small>よ</small> に も、	か く は 相 <small>あ</small> し た へ。	あ ゝ 妹 <small>いもうと</small> よ、 縁 <small>ゆかり</small> あ れ ば、	世 <small>よ</small> に 見 <small>み</small> ぬ 幸 <small>さい</small> を、 胸 <small>むね</small> に。	得 <small>う</small> し よ、 不 <small>ふ</small> 斷 <small>だん</small> に	も と め て も、	笛 <small>ふエ</small> な げ う ち て、 物 <small>もの</small> 狂 <small>くる</small> 。
---	---	---	--	---	------------------------	--

艶 <small>えん</small> な る 君 <small>きみ</small> は 誰 <small>た</small> れ、	鹿 <small>か</small> の 子 <small>こ</small> の 如 <small>ごと</small> く、 の ぼ る	足 <small>あし</small> は 莖 <small>すゐれ</small> の 花 <small>はな</small> ふ み て、	光 <small>ひかり</small> り す 輝 <small>あざ</small> け り、	目 <small>め</small> は 大 <small>おほ</small> 海 <small>うみ</small> の 似 <small>に</small> て、	か の 羽 <small>はね</small> 衣 <small>え</small> の 曲 <small>きまぐ</small> を 舞 <small>ま</small> ふ。
---	--	--	--	--	---

一ひとつ契せきりの
兄あにをこそ。

笛ふえとりあげて、
吹かきいでぬ。

調しらべにあらりと、
朗たの々たのと。

見みよ美うらくしきの毛けに、

歡あは喜きのいろのはれぬ。

君きみ喜よろこべり、
何なにかまた、

世よの煩わづらひを、
思おもふべき。

無む才さいならんや、
妹いなぐさむむる

無む才さいならんや、
妹いなぐさむむる

無む才さいならんや、
妹いなぐさむむる

無む才さいならんや、
妹いなぐさむむる

大原女

行ゆ方かた語かたれな、大原女おほはらめ

齒朶の手籠に何盛れる、
京の旅人渴けるに、
桃か、さば君與へずや。

君が跡ふむ龍犬の、
名は何「斑」と善き名なり、
斑も木かげの欲しと見る、
しばし來て坐せなう少女
手籠木にかけ、野に伏して
鄙歌ひとつ優にこそ。
さば都女の數寄こむる
鬢の風情をかたらんか。

盃 賦

“Sylvan historian, who canst thus express
A flowery tale more sweetly than our
rhyme” — Keats.

これ語り部か、岩窟に、
隠者の背を見る如く、
深く鉗めどおのづから、
胸にをしふる物語
指にいだいて希有がれば、
裾に秘色の鏘うきて、
常珍なる香を吹くに、
此は逸品と今ぞ知る。
剪裁かをる夏の夕、
燈火かやく新室や、
耻を含める花嫁が、

紅の香高き唇に、
汝か縁すこし打ち觸れて、
胸に湧きづる歡樂の
高き潮にほも堪へず、
まみ細むるを見ざりしや。

厨女さめて寐惚顔
鼠子追ふも絶わたるに
興得て律を探らうと、
四更まだ寐ねぬ詩人の、
火影に汝を需め得て、
したり顔せし日は何日か、
そは女の神に額づきて、
戀歌よむ子と吾も知る

秋の夜月の高き頃
壘道問ふと庵に入り、
戦を語る落武者が、
はや殿軍も河越ぬん、
さらばと長き矛とるに
今一つぎと老僧の
行手の幸を祈りつゝ、
汝捧ぐるを見ざりしや。

友戀ひ病めり願くは、
木暗に眠る夢の間を、
汝が肩越しに溢れては、
泡さく酒の平だに、
疲れし胸に注がせて、
酔醒訪はぬ時の間も、

ひとり興ある物狂
古るき愁を捨てしめん

あゝ盃よ、永き世の
鏝を帯びたる汝底に、
世の歡樂を染めいで、
秘密をえがく永劫の、
遠き光を透かしみて、
吾わが命のいまさらに、
意ある如きに驚いて、
獨り瞳子をこらすなり。

絶句 十九篇

山雀

“All that ever was

Joyous, and clear, and fresh, thy music

doth surpass.”

— Shelley.

鳥鳴く林の實紅をさして、
夕日に浴びたる上枝高く、
首ふる尾をふる興に入りて、
歌ふよ、山雀律も儼に、
秋嫩今日より峯を下りて、
麓の林に木の實盛れよ、
晚餐のかへるさ道を遠み、
翼の倦まんも不憫なるに。

道ゆく旅人こゝに來たり、
赤丹穂に見る額もあげず、
扱なは肩の荷解かであらば、
野守よ行手の路を貸すな。
妙なる歌にも疎き耳は、
善き子の頭ににれかるべしや。

獲物

「若うて仲間と戀に閱ぎ、
少女が日撰に時を期して、
獲物を占にと銃を荷ひ、
秋山木ぶかく勇みゆきぬ。
葉かけに角みて狙ひよれば、
こはこれ寝る雌の夢や守る、
目の色うるみて雄鹿立つに、

戀ふれば斯くかと打たて去れり、
少女子迎へて熊や射たる。
敵は粗毛の猿を得ぬと、
問ひよる顔みて銃を折りきり、
語るは空兵衛老いし樵夫、
禿げたる頭に露を浴びて、
曉今なほ山路はしる。

琥珀

琥珀にかくる、羽蟻が身の
きたなき縁を逃れいで、
透き入る眞玉の宮に眠る、
不滅のいのちを知るか君は、
都に富める子綺羅を着ても、
猶身に榮ある思なしと、

ひねもす南の窓にもたれ、
可憐や憂身を恨みなげく
あゝ君樹蔭の草をふみて、
若きが手をとりに語り行けな。
さば世に愛こそ君をまもる、
琥珀の城とも思ひ知らん。
何名を煩らひ智恵にこがれ、
敗るゝ縁に身をし委ねん。

雛祭

青磁に亂るゝ糸柳の
若芽をきざめる片枝がくれ、
かざれる雛の玉の殿を、
誰が子か仰いで獨り笑めり。
紫玉をちらせる金の冠

龍頭を彫りたる劔太刀の、
花なる御衣を透いて見ゆる、
壯なる姿を君や戀ふる。
春知りそめたる糸柳の
媚紅で見ゆるも哀れなるに、
緋桃を浮けたる瓶子あけて、
沈める思に注いで見んか。
彌生のみ空と若き命
いづれか白日の夢に似ざる。

秋懷

山森畑寺遠き牧場
落つる日ゆく雲歸る樵夫
孰れか一種の鏝を帯びて、
暮天の繪様に趣味を見ざる。

今句を得んとて路に立てば、
陣觸聞いたる武者の如く
心利騒いで得堪へざるに
田の畔踏みきて草に伏せり
若し夜の幕の落つる迄も
歌得で小道に迷ひ居らば
無才ぞ牛飼ふ群に入りて
明日より文集手には取らじ
野がへり裂けたる笛を吹くも
詩を得ぬ不興に比せば如何に

雲

遠島がくれに走る舟の
波間にうするゝ真帆と見わた
黄色に染みたる放れ雲の

秋の日風なき空をわたる
見よ今朝明遠く飛びて
目路さす彼方に細り行けど
夕暮島根に雲はかへり
落つる日抱いて其處に眠る
知恵猶とゝかぬ大空には
物皆はかなく人は見れど
放れば跡なき浮雲にも
常盤に絶むる命ぞある
あゝかの漂よふ天つ領巾に
此世の秘密を染めて見ばや

蟋蟀

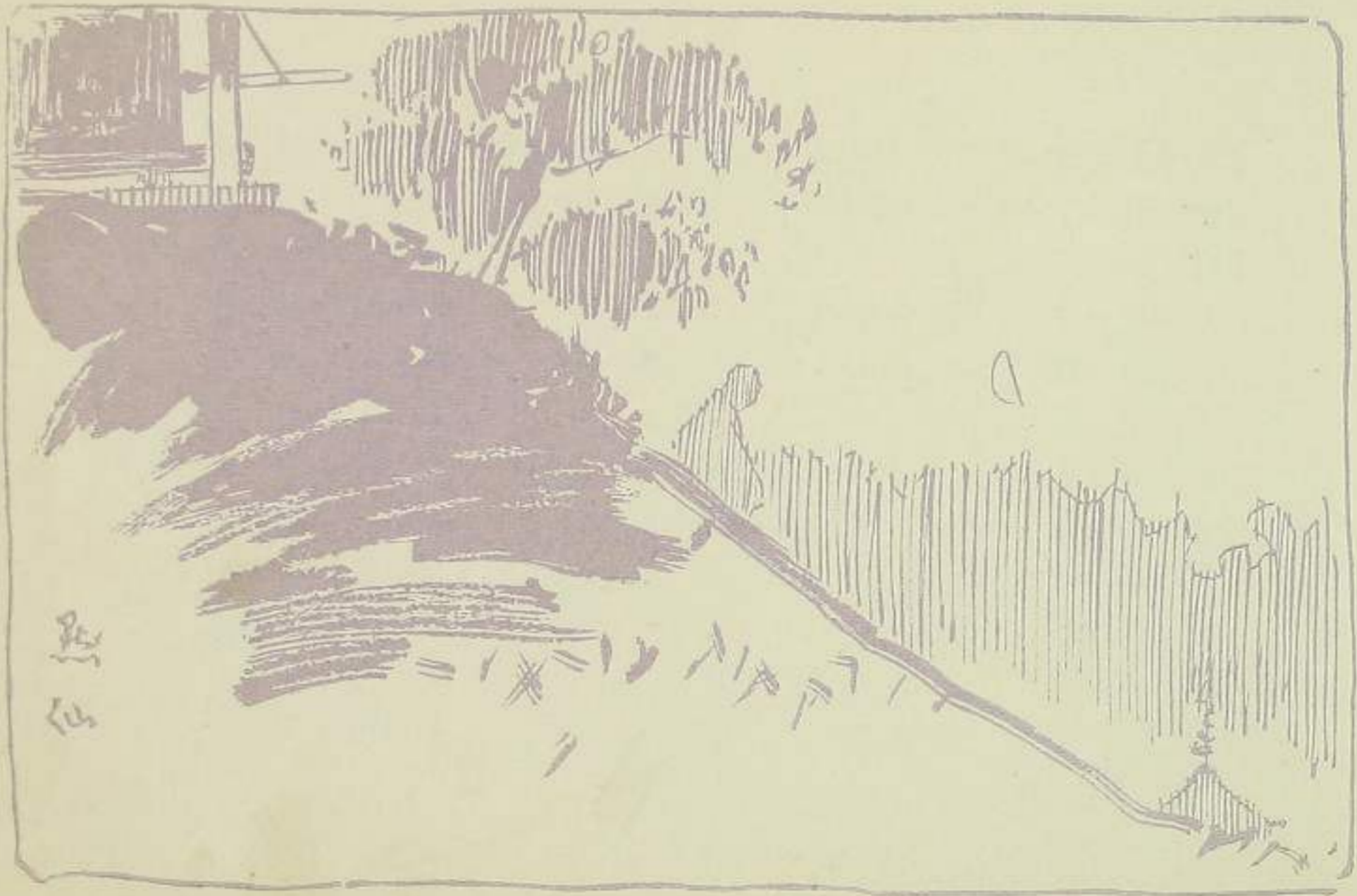
"The poetry of earth is never dead."

—Keats.

婢女眠りて厨屋さむく、
小鼠古巢にこもる夜半を、
冷江行く竈に友もあらで、
節れのづからに蟋蟀鳴く。
かすかに答ふる巴が歌の、
愉快か興がるいろも見えて、
眉の毛ふれるよ、鳴きつ飛びつ、
無心のたはむれ姿優に。
更け行く半夜の影を惜み、
自然の快樂の得たさ見たさ、
燭とり窺ふ吾を何と、
此は又おどろき飛びて行くか。
さば今隠れむ、またも細く、
唱へよ竈に君が歌を。

星

雲井の流れを吹き落して、
天風高嶺をわたる時も、
揺れず流れず星は立てり。
誰れ今自然の力否む。
神代の間に星はうまれ、
氣遠き世界を下に踏みて、
戦ひ勝ちたる武者の如く、
千載きららか空にかゝる。
今問ふ理想は消ぬべきか、
見よ彼の悪魔の走る所、
顔青さめたる瞳子うする、
地上によろばひ呻き居るよ、
魔か名を「我」といふ、然らざれば、



愚仙

詩人ぞかくやは憂きに泣かん
鐘

欲覺聞長鐘
令人發深省 一杜甫

鐘鳴る九日月は落ちて、
暗闇領する八となれば、
四隣の寂寞人も堪へで、
鐘樓にのぼるか歩み遅々と、
鐘鳴る夜の神時を知りて、
信實人眠れる門に立てば、
驚きかくるゝ人靈木魂、
歸途にまよふもかゝる時か、
うてうて再び三度四度、
三軍根城にせまる如く、
鐘の音般々ひびきわたり、

天地應トてどよむ時ぞ、
身はこれ詩人獨り覺めて、
夜すがら黙思の興に入らむ。

鬢の毛

か細きはつれも胸にまきて、
人の子とらへん力ありや、
梳ればかすかに肩をうちて。
黒髪八尺櫛にながる。
その名は「縁子」遅日日々に、
花笑見うとて門に立てど、
戀ふる子あはれむ色もなきに、
袖口噛みては泣いてかへる。
雨の日ひねもす獨りとおて、
心にゑがくはなよび姿。

燕も巢に入る夕となりて、
むかへば悲しや眉を白み、
つれなの鏡を壁になげて、
しのびに泣くかな薄き縁を、

紅 涙

歩めば橘袖にこぼれ、
かへれば姫百合裾に折れて、
往來憚かる山路來つゝ、
嗚呼また思ふは妹が上か、
巖根にこもれる荆棘がくれ、
はならぬ香を風にしめて、
隠かに萎るゝ花の如く、
怨むもかひなき己が身かや、
葉でしにさしいる朝日影に、

むすべは悲しや、吾涙の
唐紅なる色にしみて、
眞玉手さしかへ眠る夜半の、
亂るゝ髪をも染めぬべきに、
色なき石のみぬれて見ぬ

江戸河にて

織雲紫長くながれ、
落つる日黄ばめるこの夕暮、
おもむきある哉筏浮けて
舟人河瀬に軽くさせり、
静けき夕の心やりか、
欸乃一ふし歌ひさして、
笑めるよ、若い子水馴棹に、
くだくる小波をあとに見つゝ、

民皆煩らふ空のもとに、
自然の愛子か君は獨り、
赤丹穂に見る顔の色に、
心の平和さやに知らる。
詩人妬んで名残つきず、
暫しはたゆたへ、やよや舟子。

玉腕

朝明一群鱗しるく、
淺瀬に走せ散る鮎と見ひて、
まとへる綾羅色をわかみ、
透いても見ゆるや玉の腕、
葉がくれ桃の實探りよるか、
人目を煩らへ腕見ゆと、
母戸に呼ばへる聲を聞きて、

垣間見とれしを誰と知るか、
夕空虹の環横にきりて、
遠雲がくれにわたる鷺の、
猛なる翼もむしろ捨てん、
眞玉をのべたるかの腕に、
物もひ煩らふ額をよせて、
樂しき夢路をたどりなば、

紅絹袖

長鬣風ある放れ駒の、
牝馬の遠目に狂ふ如く、
軀の熱情一つによりて、
春の日ひねもす君を思ふ、
戀する心の常と知れど、
目に入る自然の物に比せば、

劣るよ若い子母に恥ぢて、
逢ふ期もをりく、時を後る。
人目や煩らふ雲に似たる
やさしき乳房を頬にもよせて、
夢路の美酒くまんのみを、
美ましいかな色を若み、
玉なる肌はだに香かれとてや、
腕うでにまかるゝ紅絹べにぬいの袖そでの。

螢

さゝらぐ小河の水際ぢかく、
螢ほたるか柳やなぎのかけに凭りて、
暗くらの夜身みひとり照りつ消ゆつ、
可憐かわや苦思くるしも知らず顔かほに、
静しずけき木の暗幕くらまくらひよりて、

思おももなき身の夜更よけぬるに、
か細こき火影ひかげに照らし見るは、
下葉したばの甲かぶを掴つかまんとか、
自然しぜんの佳居すまはいとも清まく。
自然しぜんの遊あそびはいとも樂たのし。
自然しぜんの住居すまにひとり遊あそぶ、
自然しぜんの眞子まごは幸さいある哉、
今夜こんやは子刻こく吾われも寐いねで、
河邊かべの逍遙せうせう汝なに似にうか。

蟋蟀

蟋蟀在堂 役車其休
今我不樂 日月其怡 唐風

自然しぜんの眺ながめの美う々うしい哉、
末葉すえにみだるゝ露つゆに醉さひて、

静けき夕のすさみとてや、
この草がくれに虫は鳴けり。
手纏の眞玉とさゆる音色、
軒端にこぼるゝ稷の實みても、
眉根を開いて笑みぬべきを、
何をか煩らふ君が姿、
鏡と見るまで澄める空に、
輝をうつすも心なしや、
若紫なる色にしみて、
酌めども盡きざる酒もあるに、
溢るゝ涙を袖にけして、
來りて甘露の盃を含め。

夕

彼方にけむれる森のあたり、

乳房によりそふ稚兒の如く、
静かに眠れる空の色も、
淺紫にしみゆく此夕暮、
願ふは艶なる君と二人、
野末の逍遙心足りて、
情に燃ゆる胸の中に
秘めたる小琴や弾いて見んか。
さらすは千種の花をともし、
さしそふ水枝にそよぎわたる、
涼しき夕風髪にうけて、
霞に眠れる野邊の如く、
優なる姿に倒れ伏して、
ねざめぬ夢にそ切に願へ。

眞珠

小島にかゝれる曉の月の、
溶け入る光にかぞへ見ても、
寢覺の海神龍の宮に、
得難き寶や誇りけんよ。
夕暮先づ射る一つ星の、
か細き光に透かし見ても、
沈みて果なき其命の
痛みや泣きけん蛩の子らは、
あゝ幾千歳の春の濤に、
額をひたして學びわたる、
尊き教を胸に藏め、
静かに爛めく姿みれば、
美々しき才子の瑤瑤に似たる、
瞳子の光ぞ忍ばるゝ哉。

桐葉

桐の葉飛びたり。諸手組んで、
澄みたる虚空を仰ぎ見れど、
浮雲悠悠々答なきに、
桐の葉抱いて岩に座せり。
物皆屯所を無期におくか、
今葉はこぼれて土にいれど、
千載がはらす春を待ちて、
善い哉生命を人に語る。
千曳の巖は背にも負はん、
神の戸射貫きし武者の如く、
誰身か恐るゝ心なしに、
落ち来る奪ひて木葉裂くか。
神其を作れり。誇る子らは、
來りて其身の力試せ。

尾が紅

一

若きは何ぞ耳朶の

色さへ冷めて顔くは

吾興ざめて覺ゆるに

まづ盃をかたむけよ

二

木の實食ふも種とりて

土に埋めおく君なれば

ひくき調も耻とせず

顔さしあけて歌ふなり

三

そも女子を譬ふれば

鴨目くゝる組紐か



もしも



姿はそくも、吾戀の
こき紅に燃ゆる哉

四
君深山路の木隠れに、
朽つる精舎の壁を見て、
枯れし命のおきどころ、
悲しとおもふ事なかれ。

五
われ墨染の袖をりて、
燈火掲げし程こそは、
火影にうつる本尊の
鏤たふとくも覺おけれ。

六
春の夕ぐれ只ひとり、
堂にたれたる曼陀羅に、

瘡せし尊者の肩を見て、
おもむきもなき身を泣きぬ。

七

請ふ言よせて今更に、
緇素別なしと嘲けるな、
光り見初めし始には、
吾なほ戒を知らざりき。

八

夏轉寢に、羅衣の
袂かけても秘めたるを、
瘡せし頸にまかんには、
あまりに惜しきかひな哉。

尤

燕戸に入る永き日を、
獨り寂しく入角の

太き柱に身をよせて、
説くに耻ある物思。

十

深くな問ひぞ例ある
まれの夕座に若人の
髪美しくしき姿みて、
浮世ゆかしと戀ひそめき。

十一

誰行すりに香をかぎて、
荆棘がもとを探らざる、
誰田の畔に音をきいて、
葉かけの雛をのどかざる。

十二

儘よ、肌は業風の
鋭き爪に裂けぬとも、

優しからずや力ある
腕によりてさすらはい

十三

あゝ人知れず目なれてし

御寺の庫裏を逃れいで

野に咲く花に隠れたる

胸の思を誰か知る

十四

これ引接か幻の

薄き望に導かれ

快樂の小壺此日より

むすぶか儘と思ひてき

十五

暫し木蔭に帙簞ときし

實ある頃を忍びしも

乳房さはりて吾胸の
力ある血に氣は立ちぬ

十六

塵の巷に智者しらす

情ある子のなからずや

遅日日ぐらしさすらひて

落ちたる珠をさぐらまし

十七

身は羽かるき胡蝶にて

花の香とめて行き行けば

此處に彼處に歡樂の

夢盛りなる浮世かな

十八

黒染衣ぬぎすて

紫裾濃着更ふれば

みだれて高き衾の香に、
人なつかしき思あり。

十九

頸にかゝるあまそぎの
姿をかしと指さすな、
一標手半振分の、
昔とも見よ情あらば。

二十

股の和毛に蜜ぬりて、
木ぐれにいそぐ蜂の子よ、
君が衣の香をかいは、
吾に告げこよ人しれず。

二十一

花の梢に乳をかけて、
霞をつゝむ幔幕は、

誰が歡樂のむしろかや、
揚羽の蝶の紋所。

二十二

許せ沙尼が身戀ありと、
幕引きかゝげ窺へば、
頸うちよせしめやかに、
春たのしむか諸人の。

二十三

盃かみて、手をくみて、
日かげに背く若人の
顔さしのぞく女子の、
何を囁く、忍び音に。

二十四

君唇に笑あれば、
胸に戀路の苦もなけん。

吾他の例見る度に、
むすぶの神に恨あり。

二十五

花影たゆる川隈の
岸の若草ふみゆけば、
情あるかな、よき人の
春慕ひゆく屋形舟

二十六

琴の細緒に指おちて、
唱歌の聲のおこる時、
龍頭鷓首水を蹴て、
權にりやらめく波の玉

二十七

鳴く鳥が音に苦あけて、
しばし流人のみとれずや、

病める胸には餘情ある
律呂ぞ切に堪へがたき。

二十八

伽陀になれたる耳とちて、
柳のかけによけくれば、
落つる涙はたぬれど、
胸のなやみを猶しきる。

二十九

頬にふりかゝる黒髪を、
とる透櫛にかきあけて、
衣紋つくるひ見かへれば、
髪のかゝりば香あり。

三十

見よ、瀬にはしる若鮎の
透影しるき水底に、

巳が姿をしづめては、
棹さし下る筏あり

三十一

筏筏士何見て下る、

渡漕ぐ舟足早み、

まなかひ走る少女子の

油のみどりや見て下る、

三十二

聲ふりあげて若者の

行方や知ると言とへば、

姿いかにとかへされて、

何と答へん恥かしや、

三十三

目か、黒髪のみりかゝる

額にさらめく美々しさり、

尾上を渡る明星の
暗きを闇く姿あり、

三十四

鼻か、程よく肉づきて、

顔整ふる氣高さは、

森をふまへて日に向ふ

城の櫓の風情あり、

三十五

聲か、真紅の唇に、

響きてさゆる清しさは、

花を碎いて猫叩く、

伽陵頻伽の音色あり、

三十六

袖か男のまなかひに、

地細の縞の浮かざらば、

寺の柱に嗅ぐ如き、
空薫物の香をとめよ。

三十七

名か思はずや道遙に、
一本咲ける花を見て、
髪にかぎして眺むるに、
名を問ふ隙も客れトとは。

三十八

下る筏を呼びとめて、
岸の芝生を追ひゆけば、
裾はいばらにからまれて、
圓き踵は傷つきぬ。

三十九

あかき血汐の溢れては、
野に花塗るに色鳥の

長き愁を引くみせて、
覚むる人を誘はッや。

四十

具多羅葉の末葉みて、
經思ひでん人ならば、
れつる血汐のあとをみて、
人哀ともしのばんか。

四十一

あゝわれたへず眩きて、
君がすがたに焦るゝを、
何くるしんで、僻者の
世にわづらふか、人の子よ。

四十二

會下うちむれて春の日を、
はてぬ論議に消す如く、

趣味なき事に若き身の
花にそむくはうからずや。

四十三

水面鏝びたる智恵の井に、
飲げし盃さしいれな、

ぬるき雨のしたゝらば、
花の眞袖の朽ちやせん。

四十四

見ずや、若草離々として、
霞吐く野の末とほく、

野馬うちむれて永き日を、
あかね快樂に酔ぬらし。

四十五

堅き蹄をふみあけて、
雄か香風にいちゝけば、

二つの耳をふりたてよ、
雌か鬣を波立てぬ。

四十六

腹帯ほどけて若草の
花に青毛のさまよへば、

肌背に春をうちのせて、
路なき野邊に栗毛飛ぶ。

四十七

あゝ姿あり心ある
野べの睦にくらべては、

唯耻かしき人の世や、
此處に榮なし、恩籍なし。

四十八

裾うちはらひ過ぎゆけば、
里の細道花ちりて、

胡蝶れどろく田の畔に、
妹背手とり歌うたふ。

四十九

道行くところ部落あり、

部落ある地に屯あり、

屯のなかに若きあり、

若きがなかに戀歌あり、

五十

外不興なるこの世には、

若き胸よりあふれいで、

香を吐く息の響こそ、

柱なき緒に鳴る曲と知れ。

五十一

君が姿のこひしさに、

挑の蕾の紅とりて、

日かげうつろふ白壁に、
まづ塗りそむる髮際や。

五十二

莢ふる指に鳴る豆の

細き響は傳ふれど、

それと幻に見る影の

畫にあらはれぬ悲しさや、

五十三

消して書きて消す程に、

生命ある目のうつらねば、

心のみこそいらだちて、

朱に染みたる手は倦めり、

五十四

壑道かよふ旅人の

側目もふらで路せくに、

ふりさけみれば紫の雲のあなたに日は落ちぬ

五十五

田畔づたひに渡りゆく

宵の霞に閉されて

眠りおぼゆる其中に

君もと知れど懐かしや

五十六

技さしかぎす古柏の

太き浮根に腰かけて

静かに暮るゝ此宵を

雨も注げと祈るかな

五十七

花の香を蹴て歸る如

羽露色ある燕の

髪うちぬれて吾夫子の樹陰頼まばいかならん

五十八

神此を許せ幸なくて

十歳浪路に浮きし子も

妻敵うちて寢室に入り

夜を睦語にふかさずや

五十九

若し今こゝに君を見て

若き思の物狂

吾煩ひを忘れ得ば

猶幸多き子ならんを

六十

逸品得たる市人の

富の限りを放らずや



君が腕によらんとき、
吾わが命を擲たん。

六十一

賤の男がうつ連枷に、
丹穂はらゝと散る如く、
夜の社より糠星の
きらめき落つるをかしさや。

六十二

小揃とりさす腕揚に、
おつる葉露のきらめきて、
葉守の神のさゝやさか、
暗にか細き響あり。

六十三

今薄くとも燭あらば、
下技がくれにさし入れて、

若葉にこむる春の香を、
心酔ふまで嗅がましを。

六十四

竈火うちまもる竈の神、
冷やし厨にぬる頃を、
凝らす腫子のきらゝかに、
吾ひとりのみ物狂。

六十五

暗にかくれてほのかなる、
人の姿を透しみて、
諸手さしのべよりそへば、
顔に下技の露ちりぬ。

六十六

踵にさはる花と葉の
色香も知らず探り来て、

葛まつはる其かげに、
手心圓き石を得ぬ。

六十七

是撥とみて手ずさびに、
木の振叩いて聲細く、
誦すとしもなき吾歌の
をさなき節を誰かきく。

六十八

「摩尼珠得たらば衣ときて、
深くも包め、永き日の
手慰みにと置きし間を、
吾そのかげを失ひぬ。

六十九

世に若者の頸より、
榮ある珠の名はなきを、

浅き少女のたなどこに、
定まり兼ねるうたてさよ。

七十

きみに教へん夕暮の
道危きに宿とらば、
米は黒くも美人の
白きを撰べ、旅人よ。

七十一

かの和肌到手をふれて、
底の泉をさぐりみば、
天濃漿か、枯木なる
男の知らぬ趣味を見ん。

七十二

燃ゆる思の苦しさに、
智覺なき木をかき抱き、

暫し吾世を泣く程に、
冷れたる幹を暖めぬ。

七十三

姿優なる春の夜の、
響もたてゝ更けゆけば、
鼻にぬしなき香をかぎて、
人なつかしき思する。

七十四

うるむ眼のちからなく、
空の容子を窺へば、
光りまたゝく、糠星の
眠をさそふ優しさや。

七十五

めぐる遊星小車の
響もたてな思寢の

夢やさめんとかこつまに、
夜や明けぬらし鳥ぞなく。

七十六

下枝をもれてさし照す、
明き光にねどろきて、
けむる臉をみひらけば、
こは天變か世のさまの。

七十七

誰に比すべき玉手箱
紐とく程の宵の間に、
浅ましいかな袖さけて
紫袂濃色さめぬ。

七十八

草かきわけて葉がくれの
水の溜りにうかいへば、

若き命の星と聞き、
腫子の色ぞうるみたる。

七十九

松浦佐用姫領巾ふりて、
石と化せしは趣味あれど、
唯思寝の夢の間を、
かゝる様とは疎ましや。

八十

身は木乃伊にて佇めば、
野守の鏡ひらきて、
底に罔象の聲細く、
人の歎きを笑ふめり。

八十一

君漢才に富みたれば、
吾に教へよ、鬢ぐきの

三十路をこねてあせにきと、
うらぶれ泣きし人の子を。

八十二

吾劣らめや、黒髪の
櫛にもたへではるくと、
こぼるゝ見れば、こは如何に、
緑の色のおせにたる。

八十三

風流れゆく隼鷹の
凝れる眼子と云はざるに、
唯一目見よ、春の日の
景色は早く移るひぬ。

八十四

野にさまよひし佐保姫が、
紅装の裾の糸ほつれ、

花は聲なく地にねちて、
枝にさゝやく青葉あり。

八十五

春を包みて和らげし、

霞の暮引きよけて、

いかめしいかな夏の日の

空は晴れたり高らかに。

八十六

夏の日さかり旅ゆけば、

泉のはとり野の木かげ、

憩へる人の多かるに、

人もとめよる便りあり。

八十七

君は流れの見渡しに、

一本咲ける百合の花。

吾は河原の砂に飛ぶ、
翼かよはき野の胡蝶。

八十八

儘よ水面にくるめくも、

吾れ金色の羽ふりて、

紅の香高き唇を、

君にふれでは止むべしや。

八十九

かの糸倉を引きしめて、

撥によき音を聞く如く、

思ひせまりて吾胸に、

戀の力を溢れ亂るゝ、

九十

葦間かきわけ妻どへは、

末葉の鬚に髪をよけ、

くゞり行く水うちよせて、
紫裾濃裾ぬれぬ。

九十一

小櫛は落ちて見ぬわかま、
道ゆきかへり尋ぬるに、
痛み覺はて手を見れば、
指環は朱の血に染めり。

九十二

きみ指ぎして高聲に、
降魔の相とな嘲けりぞ、
われこの底に熱情の
手ならで觸れぬ物藏す。

九十三

青葉風ある木がくれに、
行く佐保姫が身ならねど、

人目を詫びて唯ひとり、
急ぐ心を誰か知る。

九十四

行手に高き岡越の
杉の木立にはのみたて、
落つる光りを彩れる、
嚴物造こは寺か。

九十五

それと見るより住みなれし、
庫裏の古壁目に見えて、
墮落せし身の罪なれや、
ひかしゆかしく歩は遅く。

九十六

伽藍の軒に鳩飛びて、
影しづかなる境内や、

無聲をやぶる咳きに、
碎けておつる木蓮花

九十七

鐘樓にのぼる出家一人
歩みものうき日盛を、
後姿さむく石階の
下にぬかづく物思

九十八

顔ふりあげて来し方の
幾山川をながむれば、
かのづからなる其様や、
此處に雲行き雲かへる

九十九

去來迢々若き身の
長き恨に堪へやらず

顛く膝を折りしきて、
落つる涙をぬぐふかな

百

森を隔てゝ里の子の、
爺叩いて諸聲に、
歌ふは何か情ありて
世にも哀れの一ふしや

百一

「れ染十七逢合傘に、
人目恥ぢしは昨日かや、
今は法衣の袖儿帳
目もと可愛き尼額」

百二

われ朽尼の身に堪へで
趣味ある方に迷ひしが

映樂花さく下かげり、
袖ぬれがちの世なりけり、

百三

今物詣に名をかりて、
供物具すべく思へども、
塵の縁をにぎりたる、
五ツの指に恐れあり、

百四

消ゆる期もなき胸の火は、
寺にけうなき物なるに、
せめて縁ある若者の
手に擲たん名を許せ、

百五

撞く鐘の音に驚きて、
袂のちりは拂へども、

名残はつきす遅々として、
ひとり行方に迷ふかな、

遊子

*"It is not love, it is not hate,
Nor low ambition's honors lost,
That bids me loathe my present state,
And fly from a I prize the most."*

— Byron

ひと日松蔭に坐して、忠に沈めると
き奏曲高く過きゆく樂隊ありかへ
りみれい眞先にたちて銀笛を吹け
るもの幼時嬉笑を共にせりし友な
るにこそ何とかなう涙なかれて胸の
やみ眩へがたければよめる

風の荒みに耳たてり、
よべ手枕の夢やふれ、
笛の調べに君を見て、
けさ紅色の涙ふく



雲と浮びて雨となり、
 浪とながれし身なればか、
 ぬれがちにする常なるに、
 怪しむなかれ旅人よ。

旅に寝、旅に年ふるは、
 吾身ばかりと思ひしを、
 今日東路のよそにして、
 ゆかしや友を見にけりな。

君は肥れたり、笛ふいて
 天の眞名井やむすぶらん、
 吾は瘡せたり、歌屑に
 からくれなるの血を染めて

濡み勝なるまみ耳か、
 髪のみどりもあせにたる
 吾姿にもくらふれば、
 うべ若い哉君か身は、
 いづれ長さと誇りたる、
 振分髪のコばれてし、
 それかあらぬか、初花の
 色しのぼるゝ君が額
 誰か真心の紀念ぞや、
 紅さし指の玉の環は、
 懐かしい哉笛を囁む
 なが唇のくれなるの。



露も色ある松か枝に、
吹き残したる音をきけば、
刈株をわたる鶺鴒の
戀の歌にも似たる哉

細き瞳をひらめかし、
笛吹きて行く若人よ、
ゆめ苦き世の智慧の井に、
汝が舌をな試みぞ。

晝は野山を吹きとよめ、
暮は木暗に少女子の
腕をとらん折にこそ、
天の快樂はありと知れ。

律に馴れたる耳なれば、
聴くな話さし世語は、
告げて耻ある來し方の
花も實もなき我身なり。
絶る腕もわなよきて、
松が枝ごしに眺むれば、
顔に亂るゝ紅涙の
落ちて砂となりにけり。

巖頭にたちて

思に堪へで磯の邊の
巖が上にたゝすめば、
沈める海の底ふかく、
かくれて湧くや春の濤



干潟にくぼむ蜃か子の
 足占のあとにたゞへたる、
 などりに映る影みれば、
 やつれにけりな吾顔の
 耳をすませば、岩がくれ
 薄き命の響きして、
 風にあななく蘆の葉の
 波間に沈む一ふしよ
 色めきそむる葦がひの
 波に折らるゝ音をきけば
 浮世の海に漂よへる
 若き命のはかなしや

春の潮に洗はれて、
沈む真珠の色みれば、
浅ましい哉、苦き世の
涙に酔へる巳が身や。

目をめぐらせば、海神の
沈める面に恐れあり。
手を拱ねけば、吾胸の
底に知られぬ歎きあり。

髪吹きみだる、葦の葉の
風のぬるみに顔きて、
凍りはてたる額には、
熱き血汐もかれてけり。

ふるふ睫毛に溢れては、
岩に砕くる紅涙の
落ちて潮に聲あるは、
底の珠とや沈むらん。

春夜

人無更少時須惜
年不常春酒莫空 小野菫

春の光りの薄くして、
若き快樂の短かきに、
花咲く影に酔ひしれて、
酒裏叩いて歌ふ哉。
花の香砕く風をあらみ、
細き眉毛を擗ませて、

燈火にかざす少女子の
袖の心を知るや君

花を踏みては和らかき、
踵にしめる紅色の
名残の色をかへりみて、
暮れゆく春を惜む哉。

脆き此世に又いつか、
春を抱いて樂まん、
せめて今宵は歡樂に、
智恵の瞳なめぐらせぞ。
盃を含みて目を閉ぢて、
只さびしらの物思ひ、

君よ涙のせかれずば
火影にそむけ人知れず。

關山曲

君行く方に、

草鞋もとめな
旅人よ

脚絆の紐の
解けてこそ、

宿かるべきに
似たりけれ。

歌ふを聞けよ、

覺東なげの
一ふしを。

酒は飲むとも、

ふちを合みて、
泣く勿れ。

誰かは知らん、

苦き涙の
あぢはひを。

旅寝の夢の

君きみ紫からむらの

やさし
旅たびの身みの
か
今いま更さらに
からすや

人ひとの情なさけの

細こき火ほ影かげに
かへし見みよ
袖そでの綻ほころび
手てにとりて

悲かなしき
知しると云いへ
味あじを、
酔よめ醒さめの、

肌はだうら寒さむさ

髪かみのほ
嗅かぎてこそ
枕まくらに
残のこる
一ひと筋すぢの、

古ふるき憂うれい
捨すてよかし
厚あつき情なさけの
睡ね語ごに、

少せう女にょを
花はな影かげに
抱かかり
寂さびしくば

旅 も 情 の	細 き 山 路 の 夕 迷 ひ。	憂 き は 寂 し の、	君 は 急 ぐ か、 間 を。	眼 れ と あ る を、	惑 は で 長 か る に、
------------------	---------------------------------------	-----------------------------	-----------------------------------	-----------------------------	----------------------------------

明 日 は 行 手 の	す が り て 泣 き も せ ば。	嬉 し か ら ず や、 折 り、	暗 路 に 目 の 光 り、	妻 覓 狂 か、 燭 と り て、	獨 物 憂 き 紐 し め て、
----------------------------	--	--	----------------------------------	--	---------------------------------------



宿らせ玉へ、なからすや、
 旅人よ。
 草に眠れる旅客に與ふ
 覺めな、旅人、
 日ざかりは、
 越ゆるに熱き
 山路かな。
 行方も問はず、
 名も問はず、
 只安らかに
 いねたまへ。

心 <small>こころ</small>	羽 <small>はね</small>	亂 <small>みだ</small>	紅 <small>べに</small>	憂 <small>うれ</small>	葉 <small>は</small>
し	な	れ	も	さ	影 <small>かげ</small>
て	障 <small>さや</small>	て	や	も	の
や	飛 <small>と</small> 鼻 <small>はな</small> り	蝶 <small>ちょう</small> か	唇 <small>くちびる</small> し	彼 <small>か</small> な	忍 <small>しの</small> 花
よ	べ、面 <small>おもて</small> ぞ、	のへる	に、め	のげ	も
胡 <small>こ</small>	に、	羽 <small>はね</small>	る、	寝 <small>ね</small> な	れ
蝶 <small>てふ</small>				顔 <small>かほ</small> る	て、



かの眞玉手に、
 何れやさしの
 草枕
 天つ少女の
 額にまるとふ
 花かづら
 谷間の百合の
 露くみて、
 染めて見ましの
 花笑や

むしろ腕に、
 砕けても、
 君と眠らん
 花妻も

覺めな旅人
 越ゆるに熟き
 山路かな

壁にそめたる
 色めきそむる春の日を、
 垂こめてのみ暮しつゝ、
 只さびしらの物思ひ、
 悲しむなかれ少女よ

桃のうま酒くみあきて、
覺束なげの木傳ひに、
羽うちはふる雛鳥が、
酔のすさみの音を聞けよ。

振りこぼれたる前髪の
にほふ額に手をふれて、
玉の指環にあたゝかき
血汐の湧くを覺ゆや、
水に散り浮く色みれば、
花のいのちの果なしや、
老ての後のわづらひを、
若きに泣くな、少女子よ。

襟にみせたる紅衣に、
涙なかけぞ春の日の、
薄き光りに照しては、
幾日を待ちて乾くべき。

戀に燃わたる眼睛こそ、
若きが程の花と云へ、
咲き散る木々の色をみて、
なに思はずや君か身は。

眉に閉ぢたる悲しみを、
唇にくみて來たり見よ、
桃のつばみの紅とりて、
壁に染めたる一ふしを。

ひかぶり

磯の葦がひ潮にぬるゝ、
われは君ゆる袖ぬるゝ、

庭の鳩の兒小雨に瘠せぬ、
われは君ゆる顔やせぬ、

妹が禪は背にむすぶ、
われは君ゆる胸結ぶ、

賤が朝菜は夕につまる、
われは君ゆる身をつまる、

ふあうた

舟子よ漕げく、夕日の落つる
岡に色あり光あり、

舟子よ漕げく、鴨浮く波に、
刷毛一筆の黒繪あり、

舟子よ漕げく、濱風かよふ
松に隠れて琴かよる、

舟子よ漕げく、露おきむすぶ
岡に色よき木の實あり、

舟子よ漕げく、領巾振り待てる
妹にやさしき情あり、

舟子よ漕げく、少女のすめる
浦に榮あり、快樂あり。

蟹少女

君は浮べる沖の石

朝潮に、

ひたりて一層見ばぬする。

君は扇ゆる磯の芦

朝風に、

吹かれてかすかに歌うたふ。

君はすさきの一つ星

夕潮に、

寂しき姿を浮べつゝ。

君は芦間の蟹小舟

夕風に、

ゆらめく胸板ぬらしつゝ。

粉屋の女房

野こね山こね谷こねて、

京へと問へば猶三里、

粉屋の女房笑顔よく、

眉毛うちふり道を説く。

娘可笑しや

底の鏝を洗ふとて、

河の浅瀬に水雲碎き、

娘可笑しや顔赤らめぬ。

急ぐ旅人道とへば、

吃る口元袂にかくし、

娘可笑しや、顔赤らめぬ。

心化粧の東の間を、

さとき弟に指し笑はれて、

娘可笑しや、顔赤らめぬ。

蕪煮るとして鍋かけし

竈のどけば薪は消えて、

娘可笑しや、顔赤らめぬ。

れ松釜たけ、素をつめと、

女房ぶりをば母にも聞かれ、

娘可笑しや、顔赤らめぬ。

燕の賦

軒の古巢をたちはなれ、

背戸の柳の木傳ひに、

覺東なげの音にたてゝ、

羽試むる燕

一つ飛るゝ野の花に、

春の香高くしみ渡り、

水枝を染むる日の影の

花やかにさす朝ぼらけ、

翼しゆりて立ちいづる

汝世はげにも幸ありな。

その紫の浅くとも、

やがて木の葉に身をのせて、

八重の潮路を越へぬべき

羽とし見れば力あり
歌ふ音色の若くとも
やがて霞める青柳に
かの新月を呼びいづる
それと思へば調べあり
小波ぬるむこもり沿の
水際の沈を喙ばみて
はにふが軒を柱礎に
興せる壁を塗る見れば
汝は才ある工匠哉
東風かろき城の春
花の彩雲穿ち来て
獨り興ある物狂
右にかけりて色を蹴り
左に飛びて香を碎き

こぼるゝ露に驚きて
花より花に迷ひ入り
風も仇めく夕暮の
鐘にうたれて飛びくれば
上羽にしめる移り香や
酔うて眠れる佐保姫が
鬢の油やこれならん
烟に似たる春雨の
一村こめてふりしかば
花の枝より湧き出る
桃の美酒酌みあきて
新發意が讀經聲細く
花散る寺の層塔に
光まばゆき夕なぎの
西の方をば夢みつゝ

噫あゝ鳥と名は呼べど、
人にしられぬ一すぢを
胸にひめすや燕つばめ
青葉がくれに仄見ゆる
柘榴の花のくれなゐに
片笑みて鳴く雀子の
その木傳ひも何かせむ、
情は深き女子の
乳房を合む稚兒に似て、
さはれば靡く青柳の
糸にすがれるふりを見よ。
東雲早く巢をたちて、
雲の旗手を靡けつゝ、
朝羽を振ふ蘆鶴の
羽衣の曲も何かせん、

風に吹かるゝ柴の葉の
尾上越ゆるも忍ばれて、
雲紅の夕ばねに、
飄り行く姿哉。
圓き頸は葉隠れに。
かゝる葡萄を見る如く。
胸の和毛の白妙は、
女子の耻る肌に似て。
瞳子の色のらうたさは、
潮にすめる一ツ星
上毛の艶の紫は、
朱冠に彫れる雲母哉。
鳥よ羽振につかれなば、
觸れてやさしき夕影に
藤波なびく下がくれ、

若紫の酒くみて、
天の快樂を味へよ。
張くや大絃小絃の
風に亂れて鳴る如き、
酔ひのすさみの歌きかば、
誰かは愛を忘れ井の
水鏡に似たる身をすて、
ふりさげ見れば紫の
雲の行方を慕はざる。
あゝうら若き吾友よ、
ゆめ鴟梟のさかしらに、
光な避けぞ葉がくれに、
こもり沼に立つ青鷺の
かひなき事を煩らふな。
朝日に舞へば光あり、

夕日に鳴けば韻あり、
風に色あり野に香あり、
森に歌ある夏の日の
あかね快樂を求めずや。
酒にそみたるかんばせは、
寶ならずや若き身の。
歌にうるめる目の色は、
春ならずや若き身の。
飛べや梢の燕、
行方は夫と知らねども、
嫉しと思ふ汝が旅の
袖ひきとめん吾身かは。

百合花

巖のかげの小百合花

一夜のうちには蝶をうみ、
媚び姿の可愛うて、
ひねもす腕にいだきしが、

夏の光のみせたまに、
放いて見うと手をとけば、
かはす諸羽のひらくくと、
蝶は再びかへり来ず。

あら憂や、惜しき事してと、
夜たゞ巖にもたれふし、
身のあやまちを悔ひ泣けど、
蝶は再びかへり来ず。

夜あけて見れば小狐の

足に無残や、萎れたる
小百合、白百合、あゝそこに、
狂ひてかよふ蝶一つ。

秋の歌

秋は樂しや、苦ふかき
賤が軒端にかゝりたる
柿の實染めて、味そへて、
廣き枯葉の袖ぐみ、
高架はしる葉がくれに、
ふくらむ葡萄房ふとく、
若紫の酒さして、
胸あたゝかき少女子の
朱の唇待顔に、
葉分の風にゆるぐなり。



吾から振れて鳴る豆の
 莢にさねたる音を聞きて
 枯葉がくれに見入るれば
 こはなつかしや蟋蟀の
 獨り興ある物すさび
 行いて田面を眺むれば
 黄ばみて垂る、八束穂の
 鬢梳らせて稻機に
 田子を待つ間を秋姫の
 風引きとめて靡きよる
 廣き額をかきなで、
 秋の容子を窺へば
 霧の香高き東雲を

爪紅の少女が、
 鬼灯ふくむ花の野や、
 此處に優ある姿あり。
 こぼれて赤きさ、栗の
 數よみ誘る童子が、
 歌うて歸る柴山や、
 其處に静けき快樂あり。
 燈火めぐりて昏なめて、
 をとめ袖ふる星祭、
 るらゝ老爺の唇に、
 泡さく酒の色を見て、
 誰かは眉を開かざる。
 散り透く森の下がくれ、
 曉露に髪ぬれて、



窺^{うかが}狙^{ねら}ひよる獵^う人の
含^くむ小^こ笛^{ふえ}の音^ねを聞^ききて、
われ昨^{きの}の夜^よの夢^{ゆめ}忘^{わす}る。

夕^{ゆふ}空^{ぞら}高^{たか}く峯^{みね}にかへる
豊^{とよ}旗^{はた}雲^{くも}を仰^{あや}ぎ見^みて。
木^この實^みもり食^はむ山^{やま}雀^{すずめ}の、
律^{りつ}呂^{りよ}あ^ある音^ねを忍^{しの}び聞^きき、
實^みのりて見^みゆる畠^{はたけ}生^{せい}に、
重^{おも}き利^き鎌^{かま}の跡^{あと}ふみて、
露^{つゆ}のみあける鈴^{すず}蟲^{むし}の
節^{ふし}珍^{めづ}らしき歌^{うた}きけば、
秋^{あき}は樂^{たの}しや、吾^{われ}胸^{むね}に
自^し然^{ぜん}の興^{きよう}のをどるかな。

木曾川

鮎^{あひ}子^こさばしる木^き曾^そ川^{がは}の
沙^{すな}路^ぢにひとりさすらひて、
白^{しろ}貝^{がひ}拾^{ひろ}ふ少^お女^{んな}子^ごが
袖^{そで}のみどりを見^みずや君^{きみ}

頭^{くち}々^た乎^たなる人^{ひと}の世^よの
色^{いろ}なき香^かなき野^のを遠^{とほ}み、
春^{はる}の日^ひ永^{なが}のものすさび、
こは情^{なさけ}あり、をとめ子^{なまこ}よ。

赤^{あか}裳^もの裾^{すそ}のうらわかみ、
道^{みち}も榮^はある行^ゆき來^きさ、
ひそかに渡^{わた}る河^か風^{かぜ}に、

亂れて響く一ふしや。

歌ふを聞けば春の日を、
小貝拾ひて集めみて、
いづれ夫はとる、君はとる、
子安の貝を吾はとる。

それは誠か、若き身の
袖のかほりにめぐりゆく
潮の花の此春を、
君が胸にも咲きけりな。

あゝ湧きかへる吾額を、
真砂にかちて窪みたる
かの足跡に埋もらせて、

深きなさを探らばや。

琵琶湖畔にたちて

走る油鮪よ、みがくれに
網代の網はくいととも、
ゆめ洩らさしな、悲しみの
細き釣緒にさはりては。

透影しるき鱗を、
柳のかげにのぞき見て、
毒ある海にあじかなる
身の薄命をたもふかな。

木葉に似たる身を寄せて、
藻屑がくれにひるがへる

若きすすみも春の日の
暮れぬる程のひまと知れ

水際に白き小波を、

薄き鯉にくだきては、

心ありげの物すさみ、
何をかくる、吾友よ。

星の光りに影みはて、

浦づたひ行く鯉が子の

足音に響く眞砂路に、

小さき鱸をさしつけよ。

氷雨に折れし葦の葉の
春に遇ひたる心地して、

汝もつめたき砂摺に、
あつき血汐や覺ゆらん

げに人の世は荒金の

さびをし溶かす釜なりや、

眞金のつやを見まくせば、
底の熱をあた、めよ。

そこに沈める眞珠あり、

こゝに香れる野花あり、

ゆくな油脂上、宵暗を
なに恥かしき契かは、

加古河をすぎて

横雲峯にたなびきて、

光まばゆきこの夕
波しづかなる加古河の
濤に小網ひく蟹が子よ

浅瀬の波にはしりよる
鮎子な追ひぞ、苦き世の

味なき酒の盃を、
吾水上に注ぎしに。

水面に落ちて光あ
る

廣き額の色みれば、
鋭き爪の凶神は、

見ざりけらしな蟹が子よ。

君妻ありや、すさびゆく

風に毒ある人の世に、
胸やはらけき女子こそ、
頼みの宿と知りたまへ。

君稚兒ありや、懐かしの
乳房をふくむ唇に、
いろも錆びたる智恵の井の
にがき車なす、らせぞ。

小網にかゝれる白鮑の
われもかひなく驚きて、
唯恐れある物狂、
こゝに道なし、快樂なし。

行方も問ふな、名も問ふな、



弛める弦の音にも似て、
 風にわななく一ふしの
 弱きしらべを聞けな、唯

楯保川にて

水色しろき楯保川の、
 みぎはを染むる青草に、
 牛飼ひなる、里の子を、
 誰し哀れと見玉ふか

堤七里に行きくれて、
 脚絆解く間の夕闇を、
 城のやぐらに花散りて、
 老いにけるかな、この春も。

牛追ひかへる野の路に、
踏むは紫つば藁
踵すりよせ佇みて、
なげく心を知るや君

人に別れて野にくたり、
牛追ふ子らの名に入れど、
春ゆく毎に袖裂いて
昔の夢を思ふかな。

星はいでたり夜頃来て、
慰めを見る其かげに、
今宵は堪へず膝をりて、
袂に顔をさしあてぬ、

あゝ和らかき眞砂地に、
蹄のあとをさはりみて、
智覺なき身に人知れず、
熱き涙をそゞぐかな。

たのしみもなき人の世の
寂しき境に泣かんより、
われは情ある動物の
野邊の睡びを望むなり、
水色しるき楫保川の、
みぎはを染むる青草に、
牛追かへる里の子を、
誰し哀れと見玉ふか。

華燭賦

止むなくば夫れ夏の日の
若葉がくれに吹きたちて、
小石をあらふ細流の
小波まくらにぬる風を、
そよと許りに注がせて、
燈火の花の香を高め、
林神も眠る短夜を、
獨り木暗に分け入りて、
自然の致ある物狂ひ、
心なぐさに遊ばまし。
あゝ紙魚くゝる破反古の
鏝びたる海の底ふかく、

探る秀才のまみに似て、
細くきらめく色見れば、
心の鏡すみわたり、
うちに快樂の影たへ、
唯人の世のたのもしく、
木の暗闇に若草の
香るが如く、新なる
生命の味をさとる哉

巖影ふかく咲き残る
花の萼を照し見て、
高き香を鼻に嗅ぎ、
破れたる袖をかざしても、
なよび姿にはほるまば、
燈火よ燃ゆる汝胸の

げに魂合へる友なるに、
よしや火影は薄るとも、
木の芽たきこめよき人の
袖の移香しのばせよ、

これ手にとりて少女子の
清き寝顔を守るべく、
これ身にそへて歌反古の
影ある珠を拾ふべく、
脈にさはりて吾命の
さかりの春を知る如く、
暗路にむかひ天地の
道ある方を透かしみて、
頼もしいかな白毫の
幸ある影を認むべし、

暮笛集畢

頁	行	誤	正
九六	九	撤	撤
九四	七	心	心
九三	四	鳴	鳴
九二	五	挑	挑
九二	二	鳴	鳴
八九	四	春	春
八九	七	か	か
八七	四	男	男
八五	四	鮎	鮎
八四	五	流	流
八四	一	鳴	鳴
八四	四	鳴	鳴
五五	七	歡	歡
五二	三	樂	樂
三九	三	密	密
三八	三	鳴	鳴
三八	三	夕	夕
三七	十	ぐ	ぐ
三七	三	れ	れ
三七	三	鳴	鳴
二六	三	鳴	鳴
二六	八	作者	作者
二六	八	者	者
二六	八	を	を
二六	八	故	故

浩々歌客著

詩國小觀

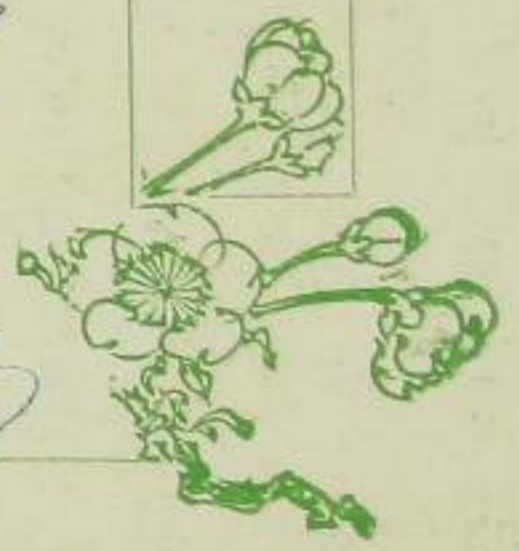
浩々歌客氏の文學雜著を収集す、要目を擧ぐれば小品に雪だるま、麓の處士、老僕、刹那、明暗、刀上、暈、田園雜興、霞浦一瞥、夜半逍遙、雲濤及老天あり、或は實寫或は架空皆著者の冥想觀念を寓せたるものなり、其他韻文にふくるふ、故郷あり、時文論評には當代の作家に對する細説あり、著者が詩國に於ける漫遊起程の消息は此篇に見るとを得べし

近刊豫告

薄田泣董君新著

明治三十三年
二月十一日發售

Chikawa
春之行記
Sayaka
春



Review
Kellie

月刊俳諧雜誌

車百合

第二號十二月一日發行
定價一冊金五錢郵稅五
厘見本郵券六錢を要す

江湖是非の聲 (帝國文學)

車百合第壹號 あゝがちるてふ浪華の浦の、
芭屋の秋の夕ぐれに、花にも紅葉にもなるべき
閑寂のをかゝみを歌はんとやまこと車百合は一
葉ちる桐の戦ぎに驚かされての後れ咲き、色香淋
しき稚子なれど、稚子は稚子たけに描筆の中より
雙幻極りなき天地を眺めて何か暈たげに小き手
をさし出すいとほしき面色御覽下され度候と
お聲にも天上天下と云ひたげなる聲して生れし
浪華の俳諧雜誌は車百合なり、所謂日本派の碧梧
桐露月など知名の俳士の名を連ねる丈ありて休
我の小さくて綿よき、表紙の大坂ものに似つかは
しからぬ遊遊き生ひさきもはかられてゆかき
心地す、

大坂市東區道修町一丁目四番屋敷
發行所 車百合發行所
大坂市東區南本町心齋橋筋角
發賣元 金尾文淵堂書店

日曜發刊

造士新聞

文藝新聞

●五號廿二字詰一行十二錢

定價
●一部 貳拾九錢
●十部 拾九錢
●半年分 拾九錢
●二年分 九拾參錢
●郵税 五厘
●廣告料 宛

造士新聞は學資に乏しき
學生を收容する造士寮の
資を補助せんが爲め發行
する日本唯一の文藝新聞
なり

大坂市玉江町一丁目六十三番屋敷

發行所 造士寮新聞部

電話西貳五九

文學書肆金尾文淵堂

八

小店は青年諸君の師友たる可き書籍雜誌を發行す
小店發行書類は充分材料を精撰し體装を堅にす
小店は諸君の需によつて百般の書籍雜誌を取次ぐ
小店は迅速正直を旨として諸君の眷顧に報せむ
小店は來春を以て文學書籍月報を發行す
小店は來春一月より一大文學雜誌を發行す可し
小店の擴張の一斑は載せて「ふた葉」第五號にあり